

## あぜみち

川上村のこの夏はこれまでになく厳しい。前半はほかの野菜同様、「デフレ安値」に苦しんだ。七、八月の最盛期は、大干ばつと異常高温にお手上げだ。平均気温で平年を三度以上も上回る高温で畑という畑でレタスの抽だい(とう立ち)が見られ、灌水は枯渇寸前。たまに降る雨は集中豪雨型でわずかに残った作物を傷めつける。それでも相場はこれまでの異常気象時ほどには至らない。挨拶代わりに交わされる「えらい年だなぁ」という言葉には、「こんな年はそうそうない」という気持ちがあるのだが、これはほんの始まりに過ぎないのかもしれない。

高度経済成長長期に工業的ともいえる拡大をし続け、成功してきたこの産地では、時代の変化に伴う方向転換を真剣に考える危機はなかった。価格が低ければ出荷数を多くして補い、異常気象による瞬間的高値が「儲かる」幻想を支えてきた。午前二時には畑に煌煌とライトが灯り、人口五千人弱の村に延べ一万人を越えるアルバイトを投入して大量生産を追求し続けてきた。しかし、それもはや限界である。

グローバル化、デフレ時代の到来以前にも、小さな産地では生き残るための問題解決を迫られて、新しいやり方を試行錯誤し

てきた。「顧客満足」、「オリジナリティ」といった、ほかの産業ではとくに当たり前になっていたことのほかに、農業ならではの「体験型」、「地域密着」、「コミュニケーション」などの特色を作ってきたところが元気に見える。製造業からサービス業へ、これが今の時代の方向転換の主流であろう。しかし、大規模化してしまつた産地に、その方向への転換はありうるのか。サービス業型か、「レタス工場」として製造業型を極めるのか。いずれにしてもその選択・転換の過程で、生産者は今までになく農業者であることや、一個人としての生き方を考えることになるのかもしれない。豊かな時代に自分を問われることなく育ってきた後継者たちが、どうふんばるのか。成功してきた大産地川上、その底力は今から試されようとしている。

(長野県川上村 赤堀公子 農業)

「夢があつていいわね」  
私は、バラの切り花栽培を営んでいる。私には二人の娘がいるが、冒頭の言葉は長女(小学一年生)のPTA関係の懇親会の席で、担任の先生が、私の職業に対しておっしゃつた言葉である。その言葉を言われた時、私は一瞬とまどいを感じた。それとも、日々の忙しさにかまけて夢を持つということ、やめてしまつていた自分に気付かされたからである。

改めて、「夢」という言葉を、辞書で調べてみた。(略) はかない、頼みがないものか。と。夢。空想的な願望。心のまよい。迷夢。将来、実現したい願い。理想。(広辞苑より)

バラの育種家の間では、青いバラを作り出す事が、何百年の間、一つの「夢」として持たれているようである。青いバラという言葉には、不可能という意味がこめられているようだ。二十一世紀を迎え、バイオテクノロジー、遺伝子操作、クローンなど、様々な技術が発達した現在も、まだ育成の途中のようである。

長女の菜月の夢は、「チアリーダーになること」という。地球温暖化などの環境問題、デフレ、リストラ、不景気に象徴される経済問題、以前の日本では考えられなかった凶悪事件の発生など、日々目まぐるしく変化し、先の見えない世の中になつている感がある。子供達、また、その次の世代も、「夢」を持ち続けられるような社会が続く事が、私の現在の「夢」である。

バラは、基本的に市場に出荷しているが、ハウスに直接みえられたお客様には、直売もしている。「毎日キレイな花に囲まれて幸せですね」。時折このように言われる方がいる。私は、花作りという、「夢」を売る仕事をしている。一人でも多くの方が、幸せになれるようなバラを作りたいと思う。

(山形県寒河江市 水戸部昭夫 バラ栽培)